

Tristram Shandy)における時間と Sterneの意匠——マルチメディア的小説

榎 本 誠

1. はじめに

18世紀のイギリスは「理性と啓蒙の時代」と言われている。科学思想の発展と技術開発によって、それまでの古い世界観や認識論から新しい世界観への脱皮が行われようとする時代であったとも言える。科学思想では17世紀のニュートン (Sir Issac Newton) の影響がますます大きくなり、哲学でも17世紀のジョン・ロック (John Locke) の経験主義的認識論の影響が大きいと言える。すなわち、このロックの経験主義的認識論はバークレー (George Berkeley) の主観的観念論や、ヒューム (David Hume) の懐疑主義等を生み出したと言われている。こうした思想・哲学が当時の文学や芸術に様々な影響を及ぼしていた⁽¹⁾。また、社会構造においても、17世紀後半から続く王権の抑制と民権の伸張は、政治的にも、社会組織的にも、様々な変化と変動を産み出していた。中でも市民階級の成立は、それまでの社会形態への大きな変化をもたらしたばかりでなく、文学の分野にとっても、大きな影響を与えていた。この現象の背後には経済的発展が存在していたのであるが、政治、社会、経済の近代化に伴って、文学、思想、宗教の分野をも含む、大きな変化の時代であったと言える。いわば、17世紀後半に始まるこうした新しい広い意味での近代化が、現実のものとして、様々な分野に浸透していく時代が18世紀のイギリスであった。今風の言い方をすれば、時代のパラダイムの転換期であったとも言えよう。

17世紀にその素地が芽生え、18世紀に現実的な変化として現われたこのような時代の転換期は、20世紀末の現代とその変化のサイクルこそ異なるが、まさしく科学技術の進展に伴う現実世界の大きな変動を経験している点では、同じような時代の変動期であろう。特に今やパソコンが家電製品のごとく当然のように一般化し始め、さらにネットワークという通信の分野のめざまし

い発展とあいまって、情報という視点から見ると、地球上各地の物理的な隔たりが無くなりつつある。また、マルチメディア (multimedia)⁽²⁾ という概念がさらに新たな分野を形作ろうとしている。

18世紀のイギリス文学では、近代小説が確立し、ジャーナリズムが確固たる立場を築き、その意味においては新しいメディアの誕生とも言える。この現象は当然のことながら、先に触れた社会組織的变化の一つである市民階級の台頭と密接に関係し、また、背後には経済的な基盤の確立があったことも見過ごすことの出来ない要素である。小説の登場は当時の市民階級の人々にとっては新たな娯楽メディアの登場であり、散文による現実味溢れる虚構の世界は、広い意味での情報の拡散という役割を結果的に担っていたことになる。⁽³⁾ 18世紀当時は様々な小説が流付していたようであるが、中でもこの小論で取上げる *Tristram Shandy* は実に奇妙な仕掛けを秘めている。この小論では「時間」というひとつの要素を軸に、Sterneの世界の斬新さと、この作品が200年以上を経た現代の我々にとってどのような意味を持つものかを探ってみたいと思う。

2. *Tristram Shandy* における時間

Laurence Sterne (1713-1768) が「有名になるために書いた」⁽⁴⁾ と言われる *The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman* は、Tristram Shandy氏が自らの生涯とそれにまつわるさまざまな意見やエピソードを語り綴るという形式の小説である。しかし、題名から推測出来るような単純な自叙伝ではない。つまり題名が『生涯と意見』であり、自叙伝の形態をとっていることから当然クロノロジカルに構成されている筈であり、主人公のたどる人生が描かれてしかるべきなのであるが、実際には作中での主人公 Tristramはたいした活躍をするわけではなく、ただ語り手として常に読者へ対峙している。しかも、構成上混沌とした印象を与えるのは、語られる内容が物事の順番どおりではなく、中断、脱線、挿入、そしてフラッシュバック的な手法が絶えずつきまとい、どれが話の本筋でどれが余計なものなのかがはっきりしなくなる。というのも、主人公となるべきTristramの登場は全9巻にわたるこの小説のなかでは、第7巻のフランス、イタリア旅行の話

くらいなもので、他は彼の父親や叔父たちを中心としたShandy家にまつわる滑稽なエピソードの集積なのである。別の言い方をすれば、この小説には物事を歴史的時間配列にそって並べるといふ、小説の前提条件的なコンベンションが欠落しているのである。⁽⁵⁾ 例えば、この小説はTristramが生まれる前の、1718年の父親と母親の夫婦の営みのエピソードから始まり、1714年の叔父TobyとWadman未亡人との恋愛事件のエピソードで終わっている。言うまでもなく、歴史的時間配列では到底考えられない構成であろう。このような奇妙な「時間」の扱いがどのようなものなのか、少し作品に沿って見てみよう。

語り手＝作者であるTristramは、“ab Ovo”（そもそもの初め）から語り始めようと、彼自身が母親の胎内に宿る、夫婦の営みのエピソードから語り始める。しかし、数十ページも行かないうちに、自分の出産に立合うことになる産婆の話へ移り、しかもその産婆の話の中でさらにYorick牧師の逸話を物語るのである。その後は父親Walterの奇説にまつわる逸話や、退役軍人である叔父Tobyにまつわる話を繙き、いっこうに肝心の主人公であるはずのTristramは誕生しない。結局、ようやく第3巻になってTristramが誕生するのだが、そこで作者Tristramは、“All my heroes are off my hand — ’tis the first time I have had a moment to spare, — and I’ll make use of it”（Ⅲ, 20, 192）と述べて、「序文」を書き始める。その後、彼の幼年期は他の登場人物たちの話題の中で時折触れられるだけなのである。しかも、第1巻の終りで亡くなったはずのYorick牧師が、第3巻以降は何事もなかったかのように登場するのである。

したがって、歴史的時間配列から言えばまさしく奇妙な感覚を与える構成になっている。しかし、このような奇抜さは決してでたらめな思い付きのまま生みだされたものではなく、作者Sterneの、ある意味では周到なトリックもしくは技法と言えり。すなわち、別の読み方をすれば、それぞれのエピソードや出来事が歴史的時間配列としてつじつまが合うように仕組まれているのである。というのも、語り手であるTristramの「時間」に関するコメントがやたらと多く見受けられるのも、この「時間」の複雑な扱いを読者に意識させる要素となっているからである。

歴史的時間の経過という視点からこの作品の流れを組み直してみると、決してこの作品がSterneの気まぐれの発想で書かれたものではないことが分る。彼は作品中でクロノロジカルな流れを辿ることが出来るような手掛かりを、Tristramの語りや歴史的事実に触れることによって、それとなく散りばめているからである。

It was some time in the summer of that year in which *Dendermond* was taken by the allies, — which was about seven years before my father came into the country, — and about as many, after the time, that my uncle *Toby* and *Trime* had privately decamped from my father's house in town, in order to lay some of the finest sieges to some of the finest fortified cities in *Europe* — (VI, 6, 416)

ここに出てくる *Dendermond* は現在のベルギーのアントワープ西南にあり、この箇所で言及されているのは、所謂スペイン継承戦争 (1702-1714) における1706年のイギリス軍が勝利をおさめた一事件である。作品中では、5年前の1701年に叔父 *Toby* は *Trim* 伍長を伴って田舎へ引きこもり、伝えられるスペイン継承戦争の戦況をたよりに、ポーリング用の芝地に模擬戦場を作ってその模擬戦闘に熱中する。また、*Dendermond* の勝利の7年後の1713年に、父 *Walter* は田舎の *Shandy Hall* に隠退し、この年はスペイン継承戦争の終結となるユトレヒト条約が結ばれ、*Dunkirk* が破壊された年である。この *Dunkirk* 破壊に落胆した *Toby* は模擬戦闘の熱が醒め、隣人の *Wadman* 未亡人に恋をするのである。*Tristram Shandy* が出版された当時は、いわゆる7年戦争の時代であり、社会的関心もそのような国運をかけた事件に向けられていたようである。作品のなかで頻繁に言及されるナミュールの包囲線や、フランダースの戦闘などは、200年後の我々よりもまだ当時の読者には馴染み深いものであった筈であろう。

いづれにせよ、作中のあちらこちらで語られている事柄を、こうした手掛かりによって、一貫した歴史的時間配列の流れの中で、つじつまを合わせる

事ができるのである。例えば、この作品の中で語られる歴史的時間配列の手掛かりを整理してみると、以下のようにまとめることが出来る。これらはあくまでも作中に明確に表現されているものだけに限定して並べたものである。なお、末尾の番号は最初に触れられている作品の巻、章である。

| 〈年号〉 | 〈出来事〉 |
|--------------------------|---|
| 1695年 | ナミュール(Namur)の包囲攻撃が行なわれ、Uncle Toby 負傷する。(I, 21) 以後4年間退役し、隠居生活を送る。(I, 25) その頃、父 Walter はロンドンで商売を始めようとしていた。(I, 25) |
| 1699年8月 | Toby は発射体についての研究に没頭する。(II, 3) その後、Trim 伍長と共に、Walter の屋敷からひそかに出奔する。(VI, 6) |
| 1701年 | Uncle Toby、Wadman 未亡人宅に泊る。(VIII, 9-10) |
| 1702年 | Uncle Toby、リエージュ(Liege)とルーレモン(Ruremond)を陥落させ、四つのはね橋のことを思いつく。 |
| 1706年 | Toby と Trim、Le Fever に会う。(VI, 6) |
| 1708年 | Toby、弾薬の調達に困り、Trim がパイプを代用することを考察する。(VI, 23) |
| 1713年 | ダンケルク(Dunkirk)破壊の年。 父 Walter、Shandy Hall に引きこもる。(VI, 6) |
| 1714年 | Uncle Toby と Wadman 未亡人との恋愛事件。 |
| 1716年 | 父 Walter、Tristram という名前を対象に、一篇の論文を書こうとしていた。 (I, 19) |
| 1717年9月 | 父 Walter と母、ロンドンへ行く。(I, 15) 同年、Le Fever 少年出陣する。(VI, 12) |
| 1718年3月の第一日曜日と月曜日にはさまれた夜 | Tristram、懐胎される。 当時父 Walter は50才と60才の中ごろ。(I, 4) 父 Walter が当時55才とすると、1633年生まれ。 |
| 1718年 | Uncle Toby の根気比べの末期で(III, 24)、この年女中 Briget が橋を壊す。 |
| 1718年11月5日 | Tristram 誕生。(I, 5) |
| 1723年 | Uncle Toby、Le Fever 少年から帰国の手紙を受け取る。(VI, 13) その6週間後、窓枠事件が起こる。(V, 17)〈Tristram 5才〉 |
| 1728年 | Uncle Toby、蠅を逃がしてやる。(II, 12) |
| 1733年4月10日 | ソルボンヌの博士達の審議が行なわれる。(I, 20) |
| 1741年 | Tristram、Noddy 氏の長男に家庭教師としてデンマーク旅行に同行する。 (I, 11)〈Tristram 23才〉 |
| 1749年(頃) | Yorick 牧師死去。(I, 10) |
| 1759年3月2日(頃) | Jenny が絹布を買う。(I, 18) |
| 1759年3月9日 | Tristram、第1巻18章を執筆中。(I, 18) |
| 1759年3月20日 | 9:00~10:00 A.M. Tristram、イギリスの気候についての新説を思いつく。(I, 21) |
| 1761年8月10日 | Tristram、第5巻17章を執筆中。(V, 17)〈当時42才〉 |
| 1766年8月12日 | Tristram、紫の胴着に黄色のスリッパ姿で、すわって第9巻1章を執筆中。 |

このように、作品の全体的な大きな時間的な流れがクロノジカルな配列の中に矛盾なく納ってしまう。すなわち、主人公Tristramの「生涯」をShandy家の年代記の中で眺めることが出来るのである。さらに、直接的に記述されていないが、さりげない表現のいくつかを根拠に、細かい年代や登場人物の年齢を特定することも可能なのである。

例えば、第1巻でTristramの出生に立合った産婆のエピソードが語られ、彼女が産婆を開業したいきさつが語られる。この話の中から彼女の生まれた年を探る事も可能である。“in the course of her practice of near twenty years in the parish” (I, 18, 45) という記述から、産婆が開業したのはTristram出生の20年前であり、“On the fifth day of *November*, 1718... was I *Tristram Shandy*, Gentleman, brought forth into this scurvy and disasterous world of ours” (I, 5, 9) という記述から、彼が生まれたのは1718年であることを考え合わせると、この産婆は1689年に開業したことになり、当時47歳であったという第7章 (I, 7, 11) の記述から、彼女が1651年生まれであることまでつきとめられる。

このような細かい事例からも、作品の脈絡のなさがSterneの単なる思いつきではなく、意図的に、周到に仕組まれた技法であることを示唆するものと言えよう。因みに作品は1760年に第1、第2巻が出版され、翌年の1761年始めに第3、第4巻が出され、その年の年末に第5、第6巻が出版されている。そして、1765年に第7、第8巻が出され、1767年出版の第9巻で終わることになる。つまり、初めから全体を書き上げて出版されたものではなく、7年間にわたって書き続けられたものである。従って、恐らくSterneの構想は、当初から周到に練られていたものと推察される。

3 多重時間構造と表現技法

さて、Sterneはこの作品を歴史的時間配列の流れに沿って書く事も出来た筈である。実際にSterneは娘Lydiaのために自らの半生(*Memoirs*)を書き残しているのだが、それはまさしく正統的な歴史的時間配列による半生記となっている。⁶⁾従って作品の背景としてのクロノロジーの否定は、Sterneの意匠を示すものとして受け止めるべきものであると考えられる。その意匠と

はどのようなものであるのか、また、その技法はどのような意味を持つものなのかを少し論じてみたい。

*Tristram Shandy*の中でも述べられているように、17世紀後半のJohn Lockeの*An Essay Concerning Human Understanding*(『人間知性論』⁽⁷⁾)をSterneは念頭に置いていたようである。Locke理論の中でも、「観念連合」(association of ideas)の理論は、この作品の時間構造を考える上で、重要な役割を持っている。例えば、Lockeの*Essay*の第2巻14章では、「時」についての考察が以下のようにまとめられている。

For, *First*, by observing what passes in our minds, how our *ideas* there in train constantly some vanish and others begin to appear, we come by the *idea* of *succession*.

Secondly, by observing a distance in the parts of this succession we get the idea of duration.

Thirdly, by sensation observing certain regular and seeming equidistant periods, we get the *ideas* of certain lengths or *measures* of *duration*, as minutes, hours, years, etc.

.

Sixthly, by considering any part of infinite duration as set out by periodical measures, we come by the *idea* of what we call *time* in general.⁽⁸⁾

ここでLockeは2つの時間相を提示している。すなわち、「観念」の連続的想起によって得られる時の流れと、外的時計時間の概念である。

It is two hours, and ten minutes, — and no more, — cried my father, looking at his watch, since Dr. *Slop* and *Obadiah* arrived, — and I know not how it happens, brother *Toby*, — but to my imagination it seems almost an age.

.....
——“I know not how it happens —— cried my father, ——
but it seems an age.”

—— ’Tis owing entirely, quoth my uncle *Toby*, to the
succession of our ideas.(Ⅲ. 18. 188-189)

Walterはさらに続いてTobyを相手に、Lockeの*Essay*を要約したような時間論を展開する。そして、テキストではこの箇所にSterne自身の注(“Vid. Locke.”)が加えられている。言うまでもなく、先に引用したLockeの言う二種類の時間性を具現化した場面である。この内的な人間の心理的時間感覚と外的な時計時間とのずれは、Sterne = Tristramにとっては格好の道具立てであったと思われる。すなわち、Locke理論の根底にある「観念連合」(association of ideas)の理論は、人間の内的な思考、観念の流れ、といったものが理性のメカニズムの中で、多様な連合を形成することを指摘するものである。また、内的時間の感覚はこの観念の多様な連合と連動し、時計時間的な流れとは別の時間的位相を形成することを示唆しているのである。それは、作者Sterneにとっては歴史的時間配列という、過去から現在への直線的な、外的時計時間の位相ではなく、語り手Tristramの意識の内部の、複雑な、整理されることのない様相を提示するための、根拠となる理論であった。

従って、Tristramの語りに見られる、絶え間ない脱線、中断、挿入、回想といった要素は、表面的には彼なりのレトリックによって理由づけされてはいるが、Tristramの意識に想起されるものをありのままに提示するための技法と言える。しかし、このような時間的⁽⁹⁾二重構造のコンセプトは小説技法のレベルに限定されているものではない。作品の「時間」的特徴に関しては、John TraugottがLocke理論との関連性を中心に論じ、“Using Lockean cant, Sterne confuses His Worship the reader so that he may know the double reality of time.”と指摘している。⁽⁹⁾また、古くはB. H. Lehman⁽¹⁰⁾やD. Van Ghent⁽¹¹⁾らが時間の二重性を指摘し、Jean-Jacques Mayouxも名称は異なるものの、やはり時間の二重性を論じている。⁽¹²⁾しかし、

これらの議論は作中の登場人物が体現する時間的三重性の段階にとどまっている。この点に関して、筆者はかつてこの作品の時間的多重構造を論じた。¹⁰³ 繰り返しを恐れず、もう一度少し要点をここで論じておきたい。

主要な登場人物たち(Walter, Toby)は、現実世界とは別に自分だけの仮想現実とも言える内的な世界を持っている。それはTristramという“Hobby-Horse”の世界なのであるが、同時にそれはそれぞれ独自の時間的位相を持つ。すなわち、先に述べた内的時間である。さらに、語り手Tristramも現実的な時計時間と、物語っているShandy家の世界にある内的時間とを、同時に経験しているのである。しかも、Sterneはこのような時間的多重構造を、それらの各時間的位相の違いによって区別するのではなく、同じレベルで、しばしば混在させる形で提示している。そのために、この作品の複雑な時間感覚が一層複雑な、そして不思議な感触となっている。このような特徴を端的に表していると思われるのが次に引用する箇所である。

...I have been getting forwards in two different journies together, and with the same dash of the pen —— for I have got entirely out of *Auxerre* in this journey which I am writing now, and I am got half way out of *Auxerre* in that which I shall write hereafter. . . I am this moment walking across the market-place of *Auxerre* with my father and my uncle *Toby*, —— in our way back to dinner —— and I am this moment also entering *Lyons* with my post-chaise broke into a thousand pieces —— and I am moreover this moment in a handsome pavillion built by *Pringello*, upon the banks of the *Garonne*, which Mons. *Sligniac* has lent me, and where I now sit rhapsodizing all these affairs. (VII, 28, 515-516)

Tristramは自らのフランス旅行を語りつつ、同時に脱線の形で父や叔父たちとのフランス旅行の思い出を語るのである。そして、ここでTristramは、思い出の時間相における二つのAuxerreに存在する自己と、これらの思

い出を想起しながらGaronne川のほとりの別荘で執筆している自己、という三つの時間相の断面図を提示している。すなわち、歴史的な時間配列の観点からすると、決して交じり合うことのない二つのAuzerresが同じ疑似的現在に並べられ、さらに現実的にそれを物語っている現在を並列に並べているのである。ここで見逃してはならないのは、もう一つの時間相である。それは、この三つの時間相を体験している読者の時間相であり、当然のことであるが、読者もまた小説世界という疑似現実の時間相と現実の時間相を持っていることを必然的に意識させられるのである。Tristramがたびたび現実的時間相の事象を引き合いに出すのは、作品を読んでいる読者に、この多重の時間構造を意識させるために他ならない。Tristramは“the strange state of affairs”と称して次のように語る。

I am this month one whole year older than I was this time twelve-month; and having got, as you perceive, almost into the middle of my fourth volume —— and no farther than to my first day's life —— 'tis demonstrative that I have three hundred and sixty-four days more life to write just now, than when I first set out; so that instead of advancing, as a common writer, in my work with what I have been doing at it —— on the contrary, I am just thrown so many volumes back. . . (IV, 13, 285-286)

すなわち、自らの生涯(“life”)を語り綴るという行為に関して、二つの時間相を同列に並べることによって、外的時間と内的時間の存在を提示している。つまり、語っている世界の時間相では、未だ生まれて一日しか経っていないのだが、その間に現実世界の時間相ではほぼ一年が経過しており、その分語るべき生涯が増えていると言うのである。勿論これは特有の詭弁ではあるが、しかし、異質な時間相を組み合わせることによって、読者はTristramと同様に小説世界の時間相と現実の時間相とのギャップに気付くことになる。Frederick R. Karlが“*But literature —— and not only fiction ——*

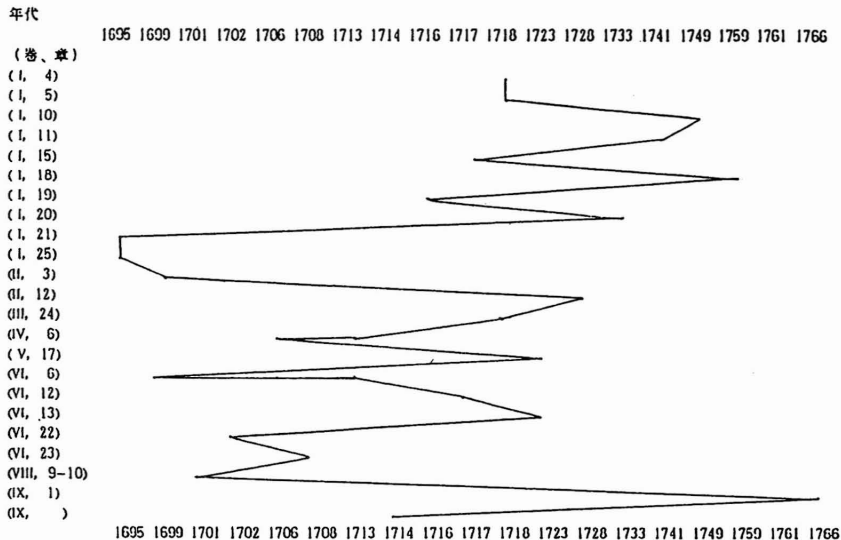
almost from its beginnings has been preoccupied with time, from the point of the author's recognition that his narrator or his own omniscience operates in a different time scheme from that of his reader⁴⁹と指摘しているのだが、作者の「時間」と読者の「時間」の二重性までもが意識されているのである。このように、*Tristram Shandy*における時間は、時間的・二重性が読者をも取り込んで作品の中で何層にも重ねられ、それらの異質な時間的位相を自在に行き来し、柔軟に操作することによって、独自の時間的感触とそれまでにない新しい小説の表現技法を創り出していると言えるのである。

4. 時間と空間を越えて

このような複雑な、多重構造を持つ小説の時間処理は、また別の効果を持つ特異な要素を帯びている。それは、書籍という物理的な形式と密接に関連した要素である。既に触れてきたように、作品では時間を自由に飛び越え、さまざまな時間相を混在させているのだが、ここでさらに注目したいのは、時間と同時に空間の超越という側面である。当たり前のことであるが、そもそも本、つまり書籍というものは、最初のページから最後のページへ向って書かれ、そして読まれて行く。このごく当たり前の物理的な制約を「時間」という要素と関連させて考えてみると、書籍を読む、もしくは書く、という行為の物理的時間を計量化するものと言える。すなわち、通常の小説形態からするとその本のページがその小説世界の進行、もしくは経過時間の具体的な軌跡であり、前のページと後のページの関係は、物理的にも固定されてしまう。言い換えると、時間と空間の物理的な制約なのである。当然ながら、現代、いや19世紀頃から、小説の時間の扱いは多様化してくるのであるが、この18世紀の近代小説という形態が確立し始めた当初では、あまりにも斬新な意匠であると言わざるを得ない。例えば、以下の図表は、この*Tristram Shandy*の内容を、その年代と語られている作品の場所とを指標にして図示したものである。

この図からも明らかのように、作品すなわち本の進行（ページ数の増加）と語られる内容の時間的進行とは全く無関係なのである。まさしく時間と空

間を自在に飛び越え、気ままに語り綴られるこの作品の流れが見て取れる。



このように、固定化された本のページという物理的かつ時間的制約を越えることのできる手法を、Sterneは導入していると言えよう。こうした技法の裏付けとなるものはやはり先に述べたLocke理論である。Sterneは観念連合の理論をその根拠とすることによって、脱線、中断、注釈、そしてフラッシュバック的手法を駆使する。その端的な例が、Tristramの誕生をめぐるさまざまな逸話の集積であろう。まるでTristramの誕生を中心として蜘蛛の巣のようにエピソードが張り巡らされていく。誕生の前に受胎から語り始めようとし、その中で父親や叔父の話題を引出し、さらに出産の際に立合った産婆の話題から、Yorick牧師のエピソードを導く。このような見事なまでの脱線は、結果として小説内部の時間を自在に往来することになり、直線的な、クロノロジカルな時間の進行はもの見事に寸断されてしまうのである。

Tristramは脱線についてこう語っている。“In a word, my work is digressive, and it is progressive too,—— and at the same time.” (I, 22, 73) この詭弁とも強がりとも取れる彼の釈明が、決して詭弁ではなく、多様な時間的位相を巧みに組合わせことによって可能となる手法を示

唆していると言えよう。先に論じた小説内部に存在する時間的多重構造と同様に、作品全体の枠組みさえも柔軟な多重構造を持ち、時間と空間を自在に駆け巡ることをTristram=Sterneは暗示しているのである。

5. おわりに

さて、この柔軟な、変幻自在な時間の操作は、この作品のもう一つの斬新な手法である表現形態の意匠とあいまって、現代の私たちから見ると極めて現代的な形態を作り出しているように思われる。すなわち、表現技法としての印刷術的（タイポグラフィカル）な意匠が、言語という活字として表現される記号だけではなく、読者の視覚に直接働きかけるグラフィックな技法を試みていることであり、⁶⁵同時に先に論じた時間の多重性によって、物理的空間とクロノロジカルな時間を越える手法である。

今や世界的に注目され、また爆発的に普及しつつあるインターネットがマルチメディアの一つの具体例であるとするならば、例えばWorld Wide Webと呼ばれるインターネットの表現方法を考えてみてもよい。これは、発信者がホームページと呼ばれるさまざまな情報書き込んだ画面を作成し、それらが世界各地のコンピュータに登録され、ネットワークを経由することによって誰もが時間と空間を越えてそれらの情報を得ることができるのである。そこには文字情報のみならず、絵画や写真、さらには音声や動画までもが取り込まれている。例えば、通信性能にもよるが、早ければ数分以内に米国のホワイトハウスのホームページを居ながらにして探索することが出来る。それは、時差や距離を全く感じさせることなく、時間と空間を飛び越える感覚を与えるものである。

これまで論じてきた*Tristram Shandy*の技法的意匠には、固定的な活字という印刷された文字情報と、直線的時間配列を正統的な基盤にした小説というメディアに、多種多様な表現媒体と技法を折り込むことによって新たな小説の世界を切り開いている点で、その斬新さと革新性が認められよう。現代に生きる私たちにとっては、18世紀当時におけるマルチ・メディアの手法とも呼べる、極めて先端的な技法を導入した小説としてとらえることができると思うのである。文学史的に言えば、今世紀に始まった「意識の流れ」とい

う新たな小説分野の元祖とも言えるだろう。また、新小説と呼ばれる実験的手法の現代小説にも一脈通じるものがあるだろう。しかし、そうした現代の新たな試みを行う小説の難解さと深刻さに比べ、*Tristram Shandy*がいかに分かりやすく、またその世界がなんと楽しいものであろうか。

*Tristram Shandy*の魅力は決して技法の斬新さと奇異な形態だけにあるわけではない。ここまで論じた意匠に満ちた技法がさらに、多様な解釈を可能にするほどの内容的な意味を秘めている。それは、人間と人生へのSterne自身の認識のありようを示唆するものであり、本来はここで論じた小説形態としての技法的意匠と不可分なものである。内容と形式の有機的な結合が、この作品の真髄であることを付け加えておきたい。そして、Sterneのこのような新しい小説形態への挑戦は、20世紀末の高度な情報化社会に生きる我々にとっては、極めて創造的で今日的な要素であることが再確認されるのである。

註

- (1) *The Eighteenth Century*, ed. Pat Rogers (London: Methuen, 1978), chap. 3, pp.120-151、参照。
- (2) 「コンピュータと家電、通信、放送などの技術が融合し、あらゆる機能を備えたメディア。パソコンとテレビ、パソコンとCD-ROMを組み合わせたりしてメディアを有機的に結合する多機能メディア。」(「現代用語の基礎知識」、p.603、自由国民社、1994年)と定義されている。
- (3) ジョン・フェザー著、箕輪成男訳、『イギリス出版史』、玉川大学出版部、1991年、pp.169-189、参照。
- (4) Laurence Sterne, *The life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman*, ed. James A. Work (New York: The Odyssey Press, 1940), introduction, xi. なお本論でのこの作品からの引照は全て(巻、章、頁)の形式で表示する。
- (5) A. D. Nuttallはこれに対して直線的語りのコンベンションの欠落であるとしている。A. D. Nuttall, *A Common Sky — Philosophy and the Literary Imagination* (London: Chatto & Windus, 1974), pp.50-51、参照。

- (6) *Letters of LAURENCE STERNE*, “Memoirs of the life and Family of the Late Rev. Mr. Laurence Sterne”, ed. L. P. Curtis (1935; rpt. London:Oxford University Press, 1967), pp.1-5.
- (7) John Locke, *An Essay Concerning Human Understanding*, Everyman’s Library Edition(1961;rpt. London:Dent & Sons, 1974). 以下本論中では*Essay*と称する。
- (8) *Ibid.*, p.159.
- (9) John Traugott, *Tristram Shandy’s World: Sterne’s Philosophical Rhetoric*(1954;rpt. New York:Russell & russell, 1970), p.42.
- (10) B. H. Lehman, “Of Tme, Personality, and the Author,” *Laurence Sterne: A Collection of Critical Essays*, ed. John Traugott (1941;rpt. New Jersey:Prentice-Hall, 1968), pp.21-33.
- (11) Dorothy Van Ghent, *The English Novel: Form and Function*(1953;rpt. New York:Haper & Row, 1961), pp.83-98.
- (12) Jean-Jacques Mayoux, “Variations on the Time-sense in *Tristram Shandy*,” *The Winged Skull*, ed. Arthur H. Cash and John M. Stedmond(London:Methuen, 1971), p.17.
- (13) 榎本誠著、『*Tristram Shandy*における時間的多重構造・試論』（「英文学誌」第21号、1978年3月、法政大学英文学会）、pp.1-15参照。
- (14) Frederic R. Karl, *A Reader’s Guide to the Eighteenth Century English Novel*(New York:The Noonday Press, 1974), p.211.
- (15) 表現技法に関しては、拙稿『*Tristram Shandy*における表現技法の意味』（「国際経営論集」第10号、1996年3月、神奈川大学経営学部）を参照されたい。